契丹大字の日付について

豊　田　五　郎

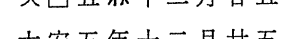
一

1951年夏遼寧省錦西県西孤山の遼墓から契丹文の墓誌が出土し，1956年に東北博物館の閻万章がその原石を調査して，考古学報1957年2期に「錦西西孤山出土契丹文墓誌研究」という一文を発表した。

これは遼陵の帝后哀冊などと違った字体で閻万章はこれを契丹小字と考えた。

私は「契丹隷字考――女真文字の源流」東洋学報1963年46巻1号に於て，この閻万章論文を紹介すると共に，この種隷書を増損したような契丹大字を契丹隷字，遼陵哀冊などの契丹小字を契丹綴字と名付け，閻万章の誤りを正し当時混同されていた契丹大小字の区別を明らかにした。閻万章によると墓誌蓋に漢文十二行があって蕭孝忠の墓誌と解ったが，漢文中の日付と対応する契丹文墓誌本文中の日付を発見して解読の鍵としている。

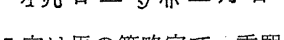
契丹文墓誌第17行にある次の記載は誌蓋の漢文の日付と一致する。



天□五年十二月廿五日

大安五年十二月廿五日

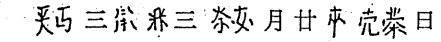
又墓誌第4行にある日付記載の



第5字は馬の簡略字で，重熙廿三年（1054年）の干支が甲午であるから，十二支のかわりに十二獣を用いていたことがわかる。そこで第4行の訳文はこうである。

重熙廿三馬年五月廿□日

又墓誌第8～9行に次の記載がある。

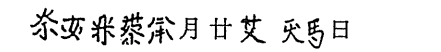


閻万章はこれについて年号を大安と推定し，陳垣二十史朔閏表をみると大安三年の干支は丁卯であるから，この第4字を兎に当るとし，第7～8字は月建であるとした。

鄭恪墓誌銘末行に維大安六年歳次庚午十月建丁亥壬辰朔二十四日とある事から推算すると，大安六年の正月は甲寅であり，遼代には夏暦の月建が用いられていることが解った。夏暦月建表（附表）によると丁卯年の三月の月建は甲辰であって，遼代十干に代り五行（木火土金水）が用いられていたので第7～8字は木竜と訳すべきであるとした。その訳文はこうである。

大安三兎年三木竜月廿□□□日

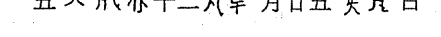
又墓誌第5行の日付はこうである。



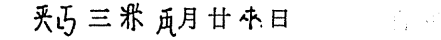
木竜年□□月廿□□馬日

陳垣二十史朔閏表で墓誌の年代大安五年に近い甲辰年は道宗の清寧十年（1064年）であるから，この木竜年は清寧十年と見た。

墓誌第11行の日付は十二月の月建から牛字をみつけ□年十二□牛月廿五□□日と訳した。その原文はこうである。

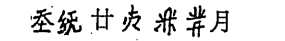


又墓誌第16行にも日付がありこう訳した。

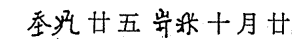


大安三年□月廿□日

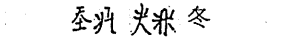
1939年故太師銘石記が発見されたが，その拓本をしらべると，契丹大字と思われる日付が数ケ所見受けられ，私はさきの「契丹隷字考」でこう読んだ。


統和廿虎年雞月

遼代で廿年をこえる年号は重熙以外には統和のみであり，統和廿年(1002年)は壬寅である。


重熙廿五猿年十月廿二日

重熙は廿四年までで廿五年は実は清寧二年（1056年）に当るが，歳次丙申なので第5字を猿とした。

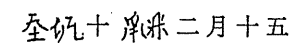

重熙元年冬


は女真字 =元の祖型である。

以上は契丹大字が九百年のヴェールを脱ぎ世にあらわれた当時の解読の過程であったがその後見るべき進展もなく今日に至った。

二

1981年中華書局から出版された陳述の「全遼文」に契丹大小字の写真が附録となっている。その内契丹大字北大王墓誌は本邦初見で，その本文153頁の北大王耶律万辛漢文墓誌銘（重熙十年）と共に阿魯科爾沁旗で発見されたものである。その漢文墓誌を見ると万辛は重熙十年二月十五日夜疾薨とあり，契丹文墓誌第19行にある次の日付と一致する。重熙十年は辛巳年で二月朔辛卯であるから，十五日は甲午に当り訳するとこうである。


重熙十蛇年二月十五木馬日

さてこの19行の第4字は，さきの蕭孝忠墓誌の第9行にもあり，閻万章は兎と読んでいた。

大安三兎年三木竜月廿□□□日

もし北大王墓誌のように兎ではなくて蛇であるとすれば閻論文のどこが間違っていたのか。

私は年号の推定が誤っていたと考える。もし大安三年（1087年）でなくて大康三年（1077年）であるとすれば，その歳次は丁巳であって，第4字は蛇となり北大王墓誌のものと一致する。大康三年丁巳年の三月の月建は甲辰で朔は辛亥であるから，改訳するとこうなる。

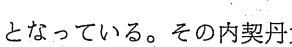
大康三蛇年三木竜月廿□□□日

それでは契丹大字解読の鍵となった蕭孝忠の死亡年月日はどうなるのか。閻万章は第17行第2字を第7行第9行の年号と同一視して  と認めこれを大安と読んだのである。

もし が大康であれば本来の大安をあらわす文字はどこか違っていた筈である。考古学報1957年2期に掲載された墓誌の写真はあまりに小さくて識別が困難なので，全遼文（1981年版）の附録蕭孝忠墓誌の写真をしらべて見ると，大安に当る第17行の第1第2字は果して  (大康) と違っていた。

大安五年十二月廿五日

又改めて「全遼文」附録写真により見なおすと墓誌第11行はこう読める。

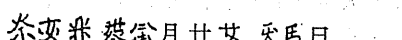

大大蛇年十二□牛月廿五大雞日

これは蕭孝忠の死亡年月日をあらわした漢文墓誌の大安五年歳次己巳十二月一日丁酉朔二十五日辛酉日辛時葬訖と一致し，その年の十二月の月建は丁丑

であるから第７字は火となる。

さて契丹大字の数字で未判明のものに四六七八九がある。これまでに 丰 艾 等数字と思われるものがあらわれたが，これについて京都大学の西田竜雄教授が「アジアの未解読文字」の200～201頁に於て蕭孝忠墓誌の 丰 を六，艾 を七と訳している。これが正しいかどうか北大王墓誌の読み方で検証してみよう。

墓誌第５行第５字は北大王墓誌により蛇とすると



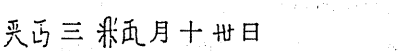
木竜年□蛇月廿□大馬日

となる。閻万章によると木竜年は清寧十年歳次甲辰であるが，改訳による蛇月は四月で月建己巳で朔は丁卯である。従って廿八日が甲午である。これを代入すると次の様になる。

木竜年土蛇月廿八大馬日

そこで第８字 艾 は七でなくて八であった。

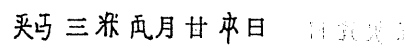
蕭孝忠墓誌第７行の



も大康三年であるが，第５字は第９行の三月の前に置かれているところから正月であり，第８字は女真字 廿 即ち七と酷似しているのでかりに十七日と読んで置く。

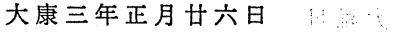
大康三年正月十七日

又16行はこう読める。



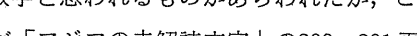
大康三年正月廿六日

次に第８行第10字を六とするとこうなる。



重熙廿三馬年五月廿六日

又北大王墓誌第15行に次の日付がある。

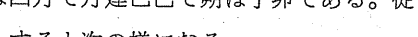


重熙七年六月

又第８～９行を見ると新しい読み方で

大康三蛇年三木竜月廿六□□日

であり，大康三年は歳次丁巳三月建甲辰，朔は辛亥でこれから数えると 丰 を六とした場合廿六日は丙子であるから第12～13字は火鼠となる。



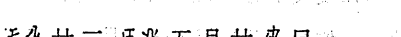
火鼠日

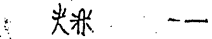
ところで問題となるのはこの第12字 兗 の読み方である。

遼代に十干は五行であらわしたので丙丁はどちらも火ということになるが，もし 丰 が六で誤りなければこれから推定した第９行の 兗 が火であるか第11行の 兗 が火であるか不明で判定するに足る新資料の発見を待ちたい。

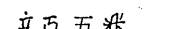
三

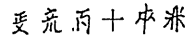
劉鳳翥[1]の「契丹大字中的紀年考釈」なる論文が民族語文1982年２期に掲載されたが北大王墓誌を研究の上閻万章の読み方を修正し次の点では私と同じ結論に達している。ついで乍ら私の説はこの論文を読む以前のものである。

	閻	劉	豊田
	大安	大康	大康
	大安	大安	大安
	兎	蛇	蛇
	□月	正月	正月

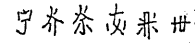

元年　元年

劉鳳翥は侯雪涼が1975年油印本中の下記の契丹大字の文を大応暦十六年としたことを引用している。それは賈敬顔珍蔵の「応暦碑」の拓本第16行で，劉鳳翥は北大王墓誌第７行の応暦五年と比べて次のように考釈している。

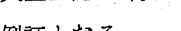

応暦五年


大応暦十白年八月十一日

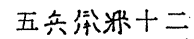
前の第１字，後の第２字は契丹大字印に見える＝印 in で応 ing と音が近く，＝麗 li は暦 li と同音である。は女真字＝八との類推で八と読んでいる。これは私がさきの蕭孝忠墓誌第５行で八とした の字とよく似ているので傍証とするに足る。なお劉鳳翥は同じ第５行をこう読んでいる。


清寧青竜年四青蛇廿□大馬日

頭初の二字は年号であり，劉鳳翥は五行即ち木火土金水の代りに五色即ち青赤黄白黒を用いる。第10字は八と読んでよい。ここではさきに私が七と解釈した卅又は卌を彼は四としたのち，私が土（戊己）と考えたを二つに分割して四青（木）としているが，蛇月は四月であるから従うべき説である。北大王墓誌15行はその漢文墓誌の重熙四年と対応することから卌が四である例証となる。


重熙四年

蕭孝忠墓誌第11行はさきに述べたが，劉鳳翥は次の様に転写し釈読している。


五黄蛇年十二紅牛月廿五黒□日

第２字と第12字を私はかつて＝大と読んでいたが，彼は第２字を＝黄

（五行の土）第12字＝黒と新解釈を加えている。第２字は正しいと考えられるが第12字は同じ字形がさきの第５行にもあり，同じ論文で大と読んでいるので私は大をとる。

劉論文が字を六でなく白（五行の金）と読んでいる点については疑義がある。

契丹大字と小字を問わず，五行と十二支獣を以て干支をあらわすほか，十二支獣のみを以てこれに代える例はあるが五行（五色）のみを以て代えた例は寡聞にして知らない。もし が來母の簡略化とすれば字源を六と考えた方が音が似ている。

四

ここ数年劉鳳翥の契丹大小字の研究には注目すべきものがあり，次の著述に期待をかけている。

私の考えのみならず閻劉両氏の説を参照すると，現在の段階で漢字との対応が確認された日付に関する契丹大字は次の通りである。

序数	大字		一	二	三	卌	五		□		□	十	廿
	漢字	元	正	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	廿
干	大字												
	漢字	木 甲乙		火 丙丁		土 戊己		金 庚辛		水 壬癸			
支	大字				□				□	卌		□	□
	漢字	鼠 子	牛 丑	虎 寅	兎 卯	竜 辰	蛇 巳	馬 午	羊 未	猿 申	雞 酉	犬 戌	猪 亥
日付	大字		月		日								
	漢字	年	月		日								
年[2]号	大字												
	漢字	統和	重熙		清寧		大康		大安				

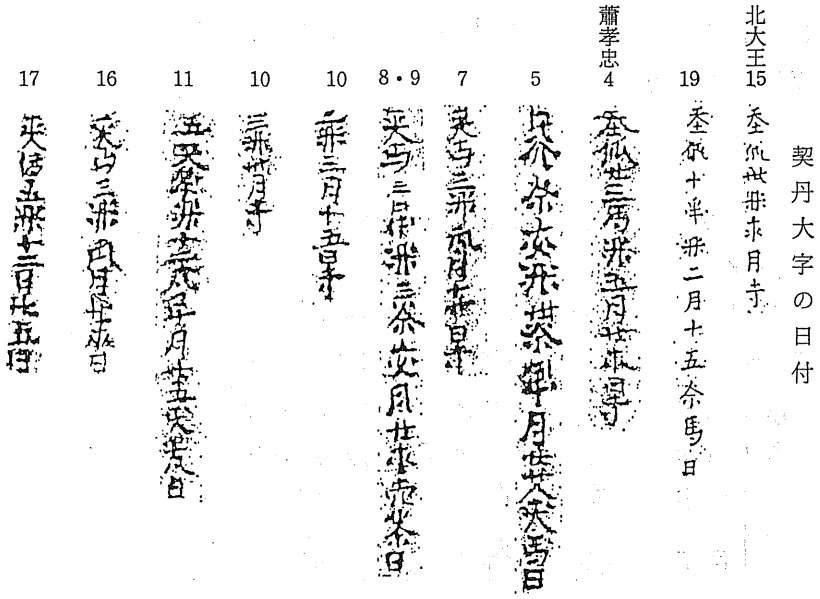
注

1) 劉鳳翥は西田教授の前掲書中劉風翥と記載されているが，これは凤(鳳)を凤(風)と誤ったものである。

2) 年号で注意を要するのは例えば 𢘑仉 は重熙に対応するものであるが，𢘑 は天をあらわし重ではなく当て字訓読に匹敵する。これは遼陵契丹小字にも共通する。

小字	𢘑𢘆	𢘑𢘓	𢘑𢘋	𢘑𢘐	𢘑𢘍
漢字	重熙	清寧	寿昌	大康	大安

契丹大字の日付



陳述「全遼文」1981 より

E 夏 曆 月 建 表　(閻万章による)

紀年十支		甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸
		子寅辰午申戌	丑卯巳未酉亥	子寅辰午申戌	丑卯巳未酉亥	子寅辰午申戌	丑卯巳未酉亥	子寅辰午申戌	丑卯巳未酉亥	子寅辰午申戌	丑卯巳未酉亥
紀元	前	7	6	5	4	3	2	1	0	9	8
	後	4	5	6	7	8	9	0	1	2	3
正月		丙寅	戊寅	庚寅	壬寅	甲寅	丙寅	戊寅	庚寅	壬寅	甲寅
二		丁卯	己卯	辛卯	癸卯	乙卯	丁卯	己卯	辛卯	癸卯	乙卯
三		戊辰	庚辰	壬辰	甲辰	丙辰	戊辰	庚辰	壬辰	甲辰	丙辰
四		己巳	辛巳	癸巳	乙巳	丁巳	己巳	辛巳	癸巳	乙巳	丁巳
五		庚午	壬午	甲午	丙午	戊午	庚午	壬午	甲午	丙午	戊午
六		辛未	癸未	乙未	丁未	己未	辛未	癸未	乙未	丁未	己未
七		壬申	甲申	丙申	戊申	庚申	壬申	甲申	丙申	戊申	庚申
八		癸酉	乙酉	丁酉	己酉	辛酉	癸酉	乙酉	丁酉	己酉	辛酉
九		甲戌	丙戌	戊戌	庚戌	壬戌	甲戌	丙戌	戊戌	庚戌	壬戌
十		乙亥	丁亥	己亥	辛亥	癸亥	乙亥	丁亥	己亥	辛亥	癸亥
十一		丙子	戊子	庚子	壬子	甲子	丙子	戊子	庚子	壬子	甲子
十二		丁丑	己丑	辛丑	癸丑	乙丑	丁丑	己丑	辛丑	癸丑	乙丑

契丹隷字考　豊田
東洋学報　第四十六巻　三五